

氏名	山口 遥子
ヨミガナ	ヤマグチ ヨウコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第526号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 天才の連想 —18世紀独英美学における観念連合論— 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	松尾 大
（論文第1副査）			（	
（作品第1副査）			（	
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	川瀬 智之
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	

（論文内容の要旨）

カントが批判哲学を世に問う前夜のドイツ哲学界に、一つの思想的流行がイギリスから押し寄せてきていた。ヒュームが「宇宙のセメント」と呼び、ジェラードが「真の天才」の本質を成すと述べた、連想すなわち観念連合（association of ideas）の理論である。ゲッティンゲン大学のヒスマンはいち早くこの理論の「大なる重要性」を喧伝し、1777年にはこれを主題に一冊の著作を公にした。そこには、1754年に既に世を去りながら、一八世紀を通じて影響を及ぼし続けていたドイツ啓蒙の巨人ヴォルフこそが、「観念連合の法則をドイツ中に知らしめた」人物であるとの評価が記されている。事実、観念連合論は、ドイツにおける美学の成立を支えた哲学者たちが、肯定的であれ批判的であれ、揃って参照した理論であった。ヴォルフによる法則の定義に端を発し、ヴォルフ学派のパウムガルテンやマイアー、またイギリス経験論から強く薫陶を受けたエーバーハルトやテーテンスによって論じられたのみならず、一八世紀美学を締めくくるカントに至るまで、観念連合論の影響は続いたのである。

観念連合論は、イギリスにおいてもドイツにおいても、天才美学の発展と密接に関わってきたと言える。イギリスに発した観念連合論の淵源は、ホップズとロックにあるが、美学にとってより重要であったのは、ヒュームによる文芸批評への導入という契機であった。ヒュームは、天才の創造性のメカニズムとして観念連合論を徹底して用いている。一八世紀は、イギリスにおいてもドイツにおいても「天才」概念の理論化が本格的に始まった時代であり、天才の創造性を支える原理が盛んに探求された。靈感、古典的規則の遵守、想像力・趣味・判断力・記憶力といった心的能力の強さや均衡、等々、天才を形作るとされる原理が数多提出されたが、ヒュームやその追随者達は「宇宙の端から端まで駆け巡る」「魔術的な」観念連合の働きこそが、天才の第一の原理だとしたのである。観念連合論はこの時代、天才の説明原理として、一つの確かな地位を占めていたと言える。また観念連合は、ホップズ以降のイギリスにおいても、ドイツにおいても、想像力の作用であると見なされたため、観念連合論史は想像力論の発展史とも重なっている。さらに、一八世紀には「創造性」概念の大変革が起きていたが、観念連合はこれにも関与していた。一八

世紀中期には、「創造性」とはもはや神のように質料から創造することではなく、質料を新たに分離・結合することであったが、観念連合論はこの近代的な創造観を支える原理となった。以上のような点を考え併せるならば、観念連合論に着目することによって、一八世紀における天才美学のダイナミズムが明らかになる、と言ってよいかもしれない。

観念連合論はしかし、一八世紀美学を強く彩った理論でありながら、その果たした役割に見合うほどの注意を払われてはこなかった。コールリッジらロマン主義詩人が注目したおかげで、一九世紀に与えた意義という観点から一八世紀イギリス文芸批評と観念連合論について若干の研究はある。しかし、この観念連合論が海を渡り、美学を生んだドイツにおいて独自の仕方で開催されたことを描きだした研究はこれまででなかった。本論は、一八世紀美学史研究におけるこうした欠落を補うものとして位置づけられる。一八世紀という天才や想像力や創造性の概念の大変革期の最中で、観念連合論は、文芸批評や美学におけるこれらの概念を支える新たな原理として注目され、用いられてきた。その意味で観念連合論は、カントに至る一八世紀ドイツ美学の成立を支えた原理の一つであったということができよう。本論で私が試みるのは、以上で述べたような天才、想像力、創造性をめぐる一八世紀美学の発展に対する、観念連合論の貢献を再評価することである。

本論は、次のような構成をとる。まず第一章が中心的に扱うのは、美学における観念連合論の源泉としてのヒュームである。ロックとヒュームの観念連合論の違いを確認し、ヒュームによっていかに観念連合論が文芸批評へと応用されたかを明らかにする。併せて、ヒュームの観念連合論を用いることによってイギリスで初めて天才を理論的に考察したジェラードと、ヒュームの観念連合論に敵対的であったリードの議論を参照し、両者との比較において、ヒュームの天才論が観念連合論によっていかに革新的なものとなり得ているかを見る。第二章では、ロックとヒュームの時代に重なるヴォルフ学派の議論を中心に扱う。ヴォルフ主義の観念連合論とヒュームのそれとの違いを明らかにした上で、バウムガルテン美学の中心的な概念である「外延的明瞭性」を、「想像力の法則」と呼ばれた観念連合論が下支えしていることを確認する。また、しばしばバウムガルテンの単なる祖述者として見なされるマイアーや、その後任であるエーバーハルトの美学における観念連合論の役割を、バウムガルテンとの比較において示す。第三章では、ドイツの観念連合論史における一つの転機となった1776年前後の観念連合論をめぐる思想的状況を主題とする。とりわけテーテンスによって、観念連合論がいかに受容され、またそれがいかに否定的参照項として「創作力」の概念を生み出す契機となったかを明らかにする。第四章で扱うのはカントの美的理念論に見られる観念連合論である。カントの美的理念論は、「親和性」に基づく連想によって概念を直感的に拡張することであり、この点でカントにおいても観念連合論の積極的意義が見出されることを明らかにする。

(論文審査結果の要旨)

美学は18世紀ドイツにおいて成立し、形成された。それに関与した理論はさまざまであるが、先だってイギリスで形成されていた観念連合の理論もその一つである。天才、想像力、創造性など、18世紀美学の中核に位置する理論の形成に決定的な影響を及ぼしたという点で、観念連合の理論は美学理論の形成に大きな役割を果たしていた。ところがこの理論が美学の成立と形成に果たした役割には、これまでの美学史研究において光が当てられてこなかった。美学史研究のこの欠落部分を埋めることが本論文の目的である。

この目的のために本論文が採用した方法は、理論テキストの深い読み込みと、各テキスト間にある関係の精緻な掘り起こしである。これは地道で多大の労力を要する作業であるが、美学史研究の王道、否、唯一の方法であるから、それを徹底して遂行した点は高く評価できる。

論文は四つの章と、その前後に置かれた「序」、「結語」から構成されている。

「序」においては、問題設定の意義、先行研究の状況が周到に記述される。

第一章は、美学における観念連合論の始まりに位置するヒュームの考察から始まる。ヒュームは、それまでに美学以外の領域で、すなわち認識一般の理論として観念連合の理論を展開させてきたイギリス経験論(ロック、ホブズ)から、文芸批評理論の要素として観念連合の概念を取り込んだ理論家として描き

出される。そして、このヒュームの理論に対する批判的反応としてジェラードとリードの理論が取り上げられる。ある理論を、それがいかに受容されたかという観点からも考察することは、その理論だけを考察するときよりもいっそう明瞭にその理論の内実と射程と限界とを示すことになるが、本論文はそれを実行することによって、ヒューム理論の、それなしでは見えなかった位相を明るみに出している。特に、ヒュームにおける「引力」概念の特異性を浮き彫りにしたことは、本論文の成果の一つである。

第二章は、舞台をドイツに転じ、美学誕生の温床となったヴォルフ学派の思想家らの理論における観念連合の問題の扱いを主題とする。先ずヴォルフその人については、その想像力論が「全体と部分」というカテゴリーによって整序されていることが確認される。以下、ヴォルフ学派に属するバウムガルテン、マイアー、エーバーハルトの三者が、このヴォルフのカテゴリーを継承しつつ、各々の仕方で観念連合の理論を発展させていったさまが丁寧に描かれる。バウムガルテンについては、「外延的明瞭性」の概念が彼の美学の重要な部分であることは、すでに多くの研究によって明らかにされているが、本論文は、この概念の基底に観念連合の理論があることを、得心のいく仕方で論証している。これは新しい知見である。マイアーとエーバーハルトは、彼らがバウムガルテン理論に付け加えたものを特定するという形で考察されている。以上の各理論は、余分な論述は含めずに、しかも重要な点はしっかりと押さえてとらえられている。

第三章では、テーテンスが観念連合の理論を受容しつつ、それを超克して、「単純表象」を生み出す能力としての「創作力」という独自の概念を構成する過程がたどられる。従来の研究には見られない精緻さで、彼の議論の主要部分が掘り起こされ、その独自性が実証される。ここでもテーテンスはその対象であるマースと対比されることによって、その理論の繊細な褻が浮き彫りにされている。

第四章では、カントの美的理念論に見られる観念連合論が主題化される。そして観念連合の理論がカント美学の重要な理論部分における決定的要因であったことが論証される。膨大なカント研究文献を渉猟、精査したうえで、観念連合の理論がカント美学で果たしていた機能に関する包括的論述がそれらには欠落していることを指摘し、この空隙を充填するため、カントが美的理念の形成を「親和性」に基づく連想として規定していることなどを示すことによって、この理論がカント美学の根幹を形作る決定的要素の一つであるという議論を展開している。ここでもカントが先行する理論を受容し、変容することによって、独自の概念を形成していくプロセスが緻密にたどられる。

以上に述べたように、美学史の花形であるバウムガルテンやカントだけでなく、美学史の側からも、心理学史の側からもあまり注目されていない理論家——たとえばエーバーハルトやテーテンス——のテキストを綿密に読み込み、そこで提示された個々の理論を、それらが互いの論争、批判において生き生きと脈打っているさまを活写しつつ、理論展開の大きな連関の中に位置づけ、それぞれの持つ貢献を明確化するとともに、連合の理論の全体像を描き切ったという意味で、従来の美学史研究の欠落したページを十分に埋めることのできる研究と言える。取り上げられるテキストは、いずれもそれぞれの体系全体と複雑に絡み合っているがゆえに、その解明には高度に理論的、弁別的な操作が要求されるが、本論文は十分にその要求を充たしている。

むろん、行うことができれば行うことが望ましいことのすべてが本論文で行なわれたわけではない。従来の美学史研究が観念連合の理論に注目してこなかった原因はいくつか考えられる。観念連合や連想という概念自体がわれわれの骨肉と化しているのも、対象化しにくいこともその一つであろう。他方、それが理論としての説明力、つまり芸術家の行うことを説得的に説明する能力を喪失したことも一因であると思われる。であれば、なぜ説明力を失ったのかも究明するに値する主題であろう。それは、観念連合の理論がその深いレベルで採用している前提自体——たとえば精神が動く方式を、諸表象を一定の仕方で構造化することとしてとらえる思考形式——の限定性をあぶり出す作業になろう。けれどもそれは、本論文で得られたような成果を基盤にして初めて可能になる作業である。その意味では、これは本論文に対する批判であるよりは、むしろ本論文の一つの意義の発見である。

以上の理由により、本論文で提示された成果は、博士の学位を認定する根拠として十分なレベルに達していると判断しうる。